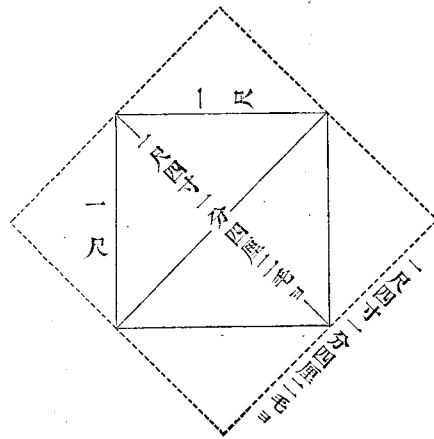


〔増字番匠往來〕曲尺裏目之事

曲尺は裏目一尺の處にて、表目壹尺四寸壹分四厘貳毛餘あり、是を一四一四二の法といふ、其出所左の如し、



右圖の如く、一尺四方の隅より隅に尺を當る時は、一尺四寸一分四厘二毛餘あり、是を曲尺の裏目とす、裏目の遣ひ方は甚ひろし、番匠家各辨へ居べき事故爰に略す、

〔數學類聚^上〕匠工のまがりかねの裏に、一種の物さしあり、是を匠工の言葉にうらがねと呼ぶ也、其おこる所を知らず、黍法にも非ず、前の七代の種にも合せず、甚不審也、表に彫付たる曲尺に比すれば、一尺四寸餘有るを十寸とし、寸毎に十分に彫割たり、此十寸を一尺としたり、其寸毎に一、字づ、彫付く、一尺に十字有り、神佛家の文にも非ず、何歟ものくしく見へたり、故に予匠に問へば、匠答て唐尺なりと云ひし也、其起る所を問へば知らずと答ふ、其後また一人の匠に問へば、是も又唐尺也と答ふ、又其興る所を問へば是もまた知らず、其後匠毎に問へども知らざる也、其用法を問へば秘密なりとて云はず、おもての曲尺一尺四寸餘にくらべて、裏は一尺にしたるを